

怒涛の追い上げ 中大健闘 箱根駅伝4位



2005年 観戦記 山井 俊昭

沿道で応援準備を終え選手到着を待つ(後ろは小田急線ロマンスカー)

新年の始まりはなんと言っても箱根駅伝、今年も50会では箱根1泊応援ツアーを敢行した。

2日11時、お天気は上々、箱根登山鉄道「風祭」駅改札口に集合し、箱根登山の5区への中継点手前の沿道へ集結、さっそく幟、横断幕を設置し、選手の到着を待つ。その間用意したCDプレーヤーから「草のみどり」や応援歌が鳴り響き、通り過ぎる人や車の注目を集める。

昨年は山登りに失敗して往路13位と例年にない残念な結果だった。今年は前評判も上々で、特に1区を走るスーパーキー上野裕一郎君に注目が集まった。しかし、今年も往路に魔物がいた。スタートしてまもなく上野君の右足に激痛が襲いもがきながら何とか2区の橋本君に襷をつないだ。肉離れでの苦戦、襷を渡すやいなやもんどり返った上野君、近くの病院へ担ぎ込まれた。1区でブービー19位のスタートとなった。



目の前を駆け抜ける野村君(6区区間賞)

応援後は宿で盛り上がる

昨年も往路13位で折り返し、復路で7位まで盛り返した実力集団は、今年もやってくれる、あきらめてはならないと刻々と入るラジオでの情報で、14位に、8位に、そして6位になったと、どんどん盛り上がっていく。

中継点近くは、観衆も多く、我々の旗を見て自称「中大ファン」が続々と集まってくる。だいたいのところはおばちゃんたちだが、用意した小旗を欲しがって困る。1本600円する小旗をむやみに配るわけにもいかないが、それでもしつこいおばちゃんには気持ちよく差し上げてしまった。「お子さんを是非中大に」と一言添えてプレゼントした。

正午過ぎに先頭を走る東海大学が来た。2番目駒大が来た。三番目日大、4番目に順大、5番目に日体大、そして先頭から4分30秒遅れで、池永君が来た。それにしても、1区1年生のアクシデントを、あとを繋ぐ先輩たちが必死にカバーする。「上野のために、上野のために」と必死に走る池永君の体が言っているようだった。スーパーキー上野君の初めての駅伝は苦い味を残して終えてしまったが、この経験はきっと来年に活かされるだろう。あと3年ある。上野君らしい箱根駅伝を是非演じて欲しい。

最後のランナー拓大が通り過ぎるのを待って昼食を予約した鈴廣「千世倭楼」へ移動した。今年の参加は16名、50会では例年箱根での宿泊用にホテル「パイプのけむり」を20名予約している。箱根はこの時期繁忙期のため、また箱根駅伝の応援客が多く、満室かあまりに高額なため部屋の確保が難しい。この「パイプのけむり」は、箱根杉本商店の杉本さんがホテル開設時にコネで取ってくれ、今年で2年目になる。



昼食は鈴廣「千世倭楼」



お正月らしい会席。50会のミニ新年会

当初20名くらいはすぐに埋まるだろうと安易に考えていたが、意外と参加申込が少ない。今年も50会のメンバー10人、特別参加で6人、合計16人での宿泊となった。20名分は買い取り予約なので、あと4人分のベットは空いたままだった。しかし、1年でもキャンセルしてしまうとその後の確保が難しくなるため、定員を割っても20名分は今後とも予約していくしかない。駅伝コースに面したホテルで、グループで利用できる場所は他にはないだろう。

2面に続く

1面から続く

50会のメンバーもすでに50を超えた世代、子供たちも独立し、正月は夫婦だけという家庭もだんだん増えてくる。「夫婦で正月は駅伝応援しよう！」がトレンドになれば、20の予約も難なく満員になることだろう。もちろん、常に優勝争いを演じ、3年に1度は優勝するくらいの強さがあれば、募集にも苦労しないだろうが。

豪華な昼食を終え、一路復路の応援拠点となる「パイプのけむり」に移動する。箱根登山鉄道「風祭」から「小涌谷」へ、駅からバスに乗り換え15分、4時前に到着し翌朝のための準備にかかった。歩道は先日の雪が残り、たいへん危険な状態だったが、手分けして早々に準備を終えた。用意された3人部屋、4人部屋を割り振り、6時からの夕食まで、しばし休憩、各々大風呂に浸かったり、部屋で昼寝したりした。築2年のこのホテルはきれいだが、テレビは小さくNHKと日本テレビしかきれいに映らない。まるで駅伝応援のために用意されたホテルのようだ。



夕食会は特別参加の人たちとも和やかに楽しんだ。それぞれ自己紹介などし、往路の反省会も行いながら復路の展望を語り合った。食事のあとも2次会部屋を用意し、差し入れられた酒やつまみで夜更けまで語り合った。このホテルは、持ち込み自由で、何事にもうるさくないのがよい。

翌朝7時の朝食を終え、早々に沿道に、2日目は晴天だとはいえ、かなりの風が吹いている。応援する6区のランナーは山くだりて多くの実績を残している野村俊輔君、昨年も目の前で先の走者を抜いてくれた。今年も大いに期待したが、残念ながら前との開きは去年ほど近くはなかった。ホテルは、復路のスタート地点から近く、8時半には全選手が駆け抜けていく。昨年もテレビカメラが我々を捕らえたが、それは野村君が前の走者を追い抜く場面にあったからだろう。今年はそれもなくてテレビには映らなかった。区間賞は取ったものの、昨年より野村君のタイムはよくなかった。前の走者が見えるのと見えないのとでは、大いに違う結果になるということか。

正月は夫婦で応援が

イベントにならば

今年の駅伝応援は晴天の中、復路での巻き返しを期待しながら終えた。

1区でのアクシデントはあったものの、その後の健闘は中々らしく堂々たるものだった。1年生の上野君の無念さはいかばかりと案じられるが、めげずに精進して次のリベンジを期待したい。きっと大きく成長してくれるだろう。

駅伝の魅力はチームプレーということにある。各区間を任された選手は全力でその役割を全うする。そして次に襷を渡す。それぞれの頑張りが全体の成績となる。駅伝を応援するたびに、組織の運営もそうしたものではないかと改めて思う。それぞれの役割を全力で尽くすことこそ大事で、それが相乗的に全体をよくする。

さて来年も同じ設定で応援ツアーをやってくれると思うが、万難を排して参加したいと思う。幸いにも我が家の息子も娘も独立し、正月は自由になる。父母連時代から10年以上このために正月留守にしていたのが今になれば好都合だということか。

### 2005年箱根駅伝成績

優勝	駒澤大	11時間3分48秒
2位	日体大	11時間7分23秒
3位	日大	11時間7分48秒
4位	中大	11時間7分49秒
5位	順大	11時間8分47秒
6位	東海大	11時間10分32秒
7位	亜大	11時間11分40秒
8位	法大	11時間13分53秒
9位	中央学院大	11時間14分35秒
10位	神奈川大	11時間14分49秒

### <2004年度50会活動報告>

- 2004年6月12日(土).....定時総会 駿河台記念館
- 2004年6月12日(土).....役員会 駿河台記念館
- 2004年6月12日(土).....はとバスツアー  
「お台場散策とアクアライン」
- 2004年10月6日(土).....役員会 駿河台記念館
- 2004年10月24日(日).....ホームカミングデー  
多摩キャンパス
- 2005年1月2日(日)3日(月).....箱根駅伝応援  
小田原中継所・小涌谷
- 2005年3月26日(土).....横浜小旅行  
- 歴史とグルメの旅 - (予定)

## 仏教的人間とは...

大宇宙、大自然につらなる「大生命」を仏教では「仏」といいます。そして「仏教」とは、一言でいえば、その大宇宙、大自然の中を永遠に貫く「真理の教え」ということになります。

従って、ここでの主題である「仏教的人間」とは、まさにこの大宇宙、大自然の「真理」を学び、そして日常的な「行」を通して、実践して生きていく姿勢を持った人間のことです。

私は、「仏教」の教えに触れるまでは、京都そして各地の寺院の「仏像」を見て廻りましても、正直に申しますと、これといった想いの中で、決して特別な受け止め方はしておりませんでした。ただ、その柔和な姿には、自然に引かれるものがありました。

仏像とキリストの十字架像では明らかにその意味は、大きく異なります。仏教の本質からみますと、仏像の持つ性格は、決して「偶像崇拜」の対象物ではありませんので、キリスト教の十字架像とは、その意を異にするのです。

本来、仏像とは、大宇宙、大自然の真理をさとられた人間のあべき姿を容として現わしたものと思います。

従って、仏像の表情には、なにか心が和む、慈悲に富む表情が表れているものなのです。そして、この世でさとりを開かれたお坊さんの容姿にも、時代を超越して、その仏像の表情に通ずる、温かなそして慈悲に富む共通の表情が伺えることに最近気付いて参りました。

私は、仏教的人間とは、即ち心に大きな喜びをもち、そして慈悲の心をもつ人間だと思えます。この大生命への歓喜とともに、人生を心から笑い、そして人生の喜びを認め、感謝の中に生きるところに仏教的に生きる人生があるものと思えます。

仏教的人間は、この人生に対する喜びをもって生きる人間ですが、一方、同時に人間の心の奥深い闇をみつめる人間でなくてはならないと思えます。釈尊は、だれよりもこの人間世界の苦悩をみつめる人間でした。

人間の中における、あるいは自分自身の中における苦悩の凝視、それなしには仏教はありえないものと思えます。その様な意味からも、「内観」を行う事の意味はあるものと思えます。

苦悩と同時に人間の悪への洞察。聖徳太子はこのことを「世間虚仮」という言葉を使っております。虚仮の世界が見抜けないような人間は、真の仏教的人間ではないということです。それは即ち仏教でいう「空」とか「無」という、結局この世の空虚さの洞察であると思えます。世界も、自分自身も嘘と煩惱のかたまりであり、このような自分の心を清め、煩惱でいっぱい自分の心を洗う必要があるのです。

白門50会は、2004年10月24日(日)卒業生を母校に1日招待する中央大学主催の行事「第15回ホームカミングデー」に参加しました。当日は、天候にも恵まれ、新企画の物産店・模擬店に加えてルナ・ハワイアンズの演奏、武蔵国府太鼓、スウィングOBバンド、茶会、中央ステージでの応援団演技など多彩な催しに3000人が参加しました。卒業生の待ち合わせ場所として今回から設置された「同期の広場」には、50年卒業の「武藤修一さん(商)」、「水村喜作さん(商)」、「長瀬芳治さん(法)」も訪れてくれました。3人とも50会の役員とは初対面。それでもやはり同じ時代を中大生として過ごした同期、自然に学生時代の話に花が咲き、50会への入会を約束してくれました。そして、今回から景品が倍増となったという福引抽選会。豪華景品を期待して会場に集まった50会でしたが、結果は...残念!

しかしホームカミングデーを充分楽しんだ我々は、モノレールで多摩センター近くの寿司屋に移動して懇親会。新しい顔が加わり学生時代の思い出話、子供の話、健康談義など尽きない話題に時を忘れるほどでした。来年もまた新しいメンバーが加わり、同期の輪が広がっていくことを期待しています。

今回のホームカミングデー参加者は次の通りです。(敬称略)

小泉、吉田、北崎、石川(賢)、一ノ瀬、大野、小口、小野寺、杉本、清野、外村、保崎、山賀、野口、塩谷、武藤、水村、長瀬 (文・外村幸雄)

私がこの仏教に学び、そして心の底から仏教の教えにひかれる理由は、まさに宇宙を貫く生命に対する歓喜の思想とともに、そこにある「自己内省」の深さにあるのです。

人間の苦や悪に対する鋭い凝視を、生の喜びや慈悲の心と同居させることに仏教的人間像の姿があるものと思います。

私は、文明という大きな枠で世界を捉えた場合、キリスト教とギリシャ哲学の総合というかたちからなるヨーロッパは、ある種の怒りの文明ではないかと思っております。キリストとソクラテスは、ともに殺された人間です。殺された人間を最上の人間として崇拝するところからは、復讐という気持ちが出てきます。その怒りの文明が、同時に近代のこの技術文明を生み出したといえるかと思えます。史実としては、宗教戦争という怒りの形として他を排斥した戦いの事実にも表れているかと思えます。

その点、釈尊のイメージはやすらかに死んでいく人間のイメージです。特に大乘仏教には、深い叡智にみちた生への肯定があります。そして、仏教の根本思想とは、これまで書き述べてきたように、「慈悲」の思想がその根底にはあります。そして、もともと仏教には排他思想がありませんし、自己をみつめる中で自己との闘いはありますが、自分以外の他との戦いの史実は存在しません。

したがって、ヨーロッパの「怒りの文明」に対して、仏教を基本に据えた文明を「慈悲の文明」と捉えることができるものと思えます。

つまり、世界規模的に混迷を深める現代社会を見た時、人類が生き続けていく為には、もしヨーロッパのこの怒りの文明を人類が克服できないとしたら、人類の生存は危ぶまれるものと思えますし、この世界から戦いは永遠になくならないものと思えます。

そういう意味でも、「慈悲の文明」を形づくれる仏教のもつ意義は大変大きいものと思えますし、そもそも日本文化には、本来そういう意味の慈悲の文化の精神的ストックがあるものと私自身は思っております。

明治以後、最も仏教的な生き方をした人は誰かと申しますと、私は、詩人の坂村信民さん、そして以外かもしれませんが、宮沢賢治をあげることができるのではないかと思います。次の機会には是非、宮沢賢治の仏教的な世界を纏めてみたいと思っております。

文・商学部卒 中村 治

## 三千人が参加しにぎわう



参加者で記念撮影

### 第15回ホームカミングデー



帰途につく参加者

# 25年ぶり東都大学リーグ制覇



2度、3度と、清水達也監督の体が、宙に舞った

## 神宮は歓喜と涙の渦

東都大学野球秋季リーグの優勝をかけた中央大学対駒沢大学の3回戦は11月5日午後1時から神宮球場で行われ、中大が3対0で駒大をみごと破り優勝を決めた。昭和54年春季いらい実に25年ぶり、通算24度目の優勝である。昭和50年卒業のわれわれにとっては卒業後30年間でやっと2度目の優勝である。

前日の薄氷を踏む対駒大戦を2×対1で破り、対戦成績を1勝1敗のタイとし、リーグ優勝をかけた最終決戦であった。

スタンドには前日の1000人の2倍以上、2000人を優に超える中大応援席。学生の姿は少なく年配のOBが大半ではあるが、8回まで1対0、最小得点差の息づまる熱戦にアルプススタンドからバックネット裏まで、OBのしわがれた声援が広がり、「C」の小旗が波のように揺れる。学会支部の幟もあちこちに見える。9回表2死、走者1塁。4番・亀井に打順が回った。この日は先制点につながった送りバントはあったものの無安打。大歓声のなか亀井のバットが一閃。白球が右翼席に吸いこまれた。相手の息の根を止める駄目押し2ランホームラン。そして9回裏の駒大最後の攻撃も、途中から登板した連投のエース会田が2アウトをとるや「あとひとり」コールにスタンドが揺れた。そして駒大最後の打者を打ち取った瞬間、スタンドの興奮は最高潮に達し、東都優勝の味を忘れかけていたOBも歓喜のあまり涙ぐんでいた。

(文・外村幸雄)

### 「集い」のあり方についてのご提案

50年白門会の幹事様方のご尽力、ご努力には大変感謝し、御礼を申し上げます。

私も会の行事にはぜひ参加させて頂こうとの思いは強くあるのですが、どうしても用事、仕事と重なりあったり、初めての参加へのプレッシャーも感じたりで、未だに会への参加には踏み込めないでおります。きっとこの様な方々が多いものと想像できます。

一つの提案ですが、多くの方々に参加して頂く行事の「集い」のあり方として、「セミナー」「シンポジウム」等を企画して頂いたらと思います。その後で、そのテーマをもとに、立食、雑談を交えての懇親会ならば参加しやすいものと思います。大学時代のゼミの延長と考えても良いのかもしれませんが。

大学の先生方、卒業生先輩、又、同窓生の中にもテーマによってはお願いできる方がいらっしゃるはずで

テーマとしては、例えば私どもの年代の共通のテーマ、皆さんに興味を持って頂けるテーマを検討して頂き、講演者をお願いをして頂けたらと思います。

例えば、年金問題、切実な？老後の問題、環境問題、陪審員制度の導入問題、経済情勢の様々な問題等々、色々と考えられます。

今後の50白門会「集い」のあり方の参考として頂けたらと思います、提案をさせていただきます。

(商学部卒 中村 治)

あけましておめで  
とございます。  
今年も多くの原稿  
と写真、有難うござ  
いまして。特に中村  
治様からは昨年、投  
稿呼びかけと同時に  
2本も原稿をお寄せ  
いただき本当に感謝  
しております。なる  
べく定期的な発行を  
心がけております  
が、皆様からの更な  
るご厚意に頼る次第  
です。今回から題字  
の付け日は、年と月  
のみとしました。ま  
た、紙数の都合で原  
稿の一部割愛させて  
いただきます。ご  
了承下さい。  
外村、山下